

現在主義から時間の流れを考える

山名 諒 (Ryo Yamana)

京都大学

現代時間論の主戦場は存在論に移っていると言っても過言ではない。近年では、過去と現在が存在し未来は存在しないとする「成長ブロック説」や、過去も現在も未来も存在するとする「スポットライト説」など、現在主義とは異なる A 理論の存在論を扱う著作が登場し、注目を集めている（前者の例として F. Correia & S. Rosenkranz 2018、後者の例としては B. Skow 2015）。A 理論がどのような存在論を構築すべきか（過去・現在・未来のどれが存在するか）はたしかに重要な問いであるものの、それだけでは時間固有の性質である動性（時間の流れ）を解明することはできない。こうした背景のもと私は、存在論の問題が時間経過の問題と直結しており、前者の解決のために後者を解決する必要があることを示すことで、存在論に偏りがちな現代時間論の主題を時間経過の方向へと（微量ながら）軌道修正することを試みる。

現在主義の存在論は一般に「いつでもすべてのものは現在にある」（以下 (P) とする）と表現される。この定式化に対して、(P) は自明にすぎないか、明らかな偽であるかのどちらかであり、いずれにせよ有意味にはならないとする「自明性の反論 (Triviality Objection)」が存在する。本発表で私は現在主義の存在論に対するこの反論が同時に時間経過の可能性に対する反論でもあると主張する。

議論は次の流れで進行する。(1) まず、自明性の反論が妥当である——(P) が有意味な主張にはなりえない——のは、時制演算子「いつでも」と存在論の定式化に不可欠な「端的な存在」概念とが両立不可能であるからだと主張する。すなわち本発表の主張によれば、(P) が有意味になりえないのは、それが永久主義と競合しうるテーゼであるためには時点に相対化されない「端的な存在」の概念を用いる必要があるにもかかわらず、「いつでも」の作用域内の量子子 (tensed quantifier) は各時点にそのドメインが相対化されているからである。(2) 次に、自明性の反論を生じさせる原因を「端的な存在が変化する」という現在主義の考えのうちに特定する。現在主義のもとで時間経過が「端的な存在の変化」として説明されることを考慮すれば、(P) が失敗する原因は時間経過の概念のうちに含まれていることが判明する。(3) 最後に、時間が許せば、「端的な存在の変化」という考えから時間経過を構成する諸原理を抽出し、矛盾を生じさせる原理と矛盾を解除する原理の両方が時間経過の概念に内在していることを指摘する。この点をふまえることで、

矛盾する／しないで捉える古典的で一面的な理解には収まらない、時間経過の複雑な在り方が見えてくるだろう。